

# 1月第1週の礼拝説教

- 日 時：2026年1月4日（日）10：30～11：30 降誕節第2主日礼拝
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ルカによる福音書2章41～52節（新約P104～105）
- 説教題：「神と人とに愛され」
- 讃美歌：278（暗き闇に星光り、）  
368（新しい年を迎えて）

最初に、新しい年 2026 年 1 月の最初の主の日を、皆様方と共に迎えることができたことを、主なる神様に感謝したいと思います。私たちは、昨年の 11 月 30 日から主イエス・キリストの御降誕を待ち望む待降節を過ごし、クリスマスには主イエス・キリストの誕生を祝い、2025 年の最後に主日には、幼子としてお生まれになった主イエスを最初に礼拝した東方の占星術の学者たちと自らを重ねて礼拝し、本日の新年の礼拝に集うことができました。そして、本日の聖書箇所ルカによる福音書2章41節から52節は、その幼子がどのように育っていかれたかということを、唯一、語っている箇所になります。

新約聖書には四つの福音書があります。福音書には、主イエス・キリストのご生涯、そのみ業やみ言葉が語られています。ですから、私たちは福音書をイエス・キリストの伝記だと思ってしまいがちです。特に共観福音書と言われるマタイ・マルコ・ルカの三つの福音書を読んでいくときに、そのように受け止めてしまいがちです。けれども、福音書は伝記ではありません。伝記というのは、ある人の誕生から死までの歩みを語るものですが、四つの福音書の中で、イエス・キリストの誕生を語っているのはマタイによる福音書とルカによる福音書だけです。そして、伝記であれば、その人の生い立ち、どのように育ち、どのような子供時代を過ごしたか、どういう仕事をしたか、どういう業績を上げたか、そういうことが内容になっていくわけですけれども、福音書はそれらのことをほとんど語りません。12歳の主イエスをめぐるエピソードを語る本日の聖書箇所は、先ほども申し上げましたが、聖書の中で主イエスの子供時代の姿を描いているただ一つの箇所なのです。けれども、先ほど司式者にお読みいただいたことからも分かるように、ルカによる福音書の著者は、イエスという人物の伝記を書こうとしてはいないのです。では、ルカによる福音書で描かれている主イエスの様子を通して、著者は何を語ろうとしているのでしょうか。

昔から、偉人と呼ばれる人物については、誕生から子供時代などの様子が伝説となって伝えられてきました。例えば、小さな時から非常に優秀だったとか、あるいは非常に変わった子どもだったとか、仏教を開いたと言われるお釈迦様についてなどは、その母がルンビニ園という花園に差し掛かったときに誕生し、その直後に立ち上がって7歩歩き、右手で天を左手で大地を指差したまま、「天上天下唯我独尊」（てんじょうてんげゆいがどくそん）と言った、ということが語られています。主イエスについてもそのような伝説がいろいろ伝えられていたようですが、私どもが手にしている新共同訳聖書、いわゆる正典と呼ばれる中には含まれておりません。外典、偽典などを読んでいくと、そういうことが書かれている書物もあります。しかし、それらはどれも正典の福音書に取り上げられることはありませんでした。福音書は、主イエスがいかに立派な人間であったか、どんな素晴らしい働きをしたか、そして子供時代からその片鱗が見えた、というようなことを語ろうとはしていないのです。しかし、本日の箇所だけは、47節に「聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた」と記されているように、12歳の少年イエスが、その賢い受け答えによってエルサレムの学者たちを驚かせたことを語っています。

ところで、41節、42節を読みますと、主イエスの両親、ヨセフとマリアは毎年過越祭にエルサレムに巡礼に行っており、主イエスが12歳になった年にも、主イエスを連れてエルサレムに上ったことが分かります。「両親は祭りの慣習に従って都に上った」と書かれています。これは、イスラエルの民は、はるかエルサレムから遠いところに離れていても、あるいは近くにいても、過越祭、あるいは三大祝祭と言われる祝祭の時には、できればエルサレム神殿にお参りをすることが定められていたと言われています。ここで、よく注目してください。「両親」と書かれています。母マリアと父ヨセフとは書かれておりません。これは非常に重要なポイントになると思います。12歳になったということには特別な意味があります。ユダヤ人の男子は13歳になると「バル・ミツバ」と呼ばれる成人式をシナゴーグで行い、神の民の一人となり、神を礼拝し、その掟、律法を守って生きる責任を負う者となるのです。ですから、その前年の12歳というのは、来年からは大人のイスラエルの民として過越祭に来ることになる、という特別な時です。そのような大切な節目の年に、主イエスは両親と共に過越祭に来たのです。過越祭は、イスラエルの民が奴隸とされていたエジプトから脱出したことを記念する祭です。その日には、過越の小羊を屠って家族みんなで過越の食事をし、それから七日間は酵母を入れないパンを食べます。これは、イスラエルの民がエジプトを出た日に、民は急いで出発しなければならなかつたので、パンに酵母を入れて発酵させている時間がなかったことに由来します。そのことを記念して、酵母を入れないパン、小麦粉と塩と水でねっただけの硬いパンを食して、自分たちの祖先がどのような苦しみの果てに神様の約束の地に入っていたのか、ということをしのぶわけです。本日の聖書箇所43節に「祭りの期間が終わって」とあるのは、この酵母を入れないパンを食べる七日の期間が終わって、ということです。彼らはこの一週間の祭りの期間をエルサレムで過ごし、帰路に着いたのです。同じナザレの村からこの祭りに来ていた親戚や知人が沢山いましたから、両親はイエスもその人たちの中のどこかにいるだろうと安心していました。しかし一日の道のりを行き、いよいよ宿に泊まる時になって、初めて、イエスがいないことに気づいたのでしょう。両親は、親類や知人の間を探し回りながらエルサレムへと引き返しました。しかし、イエスは見つかりません。三日目に神殿に行ってみると、その境内に主イエスがいたのです。

12歳の主イエスは、46節にあるように、「学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりして」いました。そして「聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた」のです。この「学者たち」というのは、いわゆる律法学者と呼ばれる人々です。しかし、この神殿での少年イエスの姿は、後の主イエスに見られるような、律法学者たちを批判し、その権威を否定している姿ではなく、先輩の学者たちから熱心に神の教えを聞き、学んでいる姿なのです。ここに、この福音書の著者ルカがこの話を記した意味があると思います。主イエスの姿は、自分は神の子、真の神なのだから、人から教えられなくても神の言葉は最初からよく知っている、という姿ではなかったのです。ここに、私たちと同じ人間になって下さった主イエスのへりくだりが示されています。それと同時に、ここには、私たちが神のみ言葉や教え、つまり信仰の事柄に対して取るべき姿勢が示されていると言えるでしょう。私たちは、神のみ言葉を聞いて学ばなければならぬのです。信仰の事柄は、学ばなくとも分かるというものではありません。もちろん、理解力がなければ信仰が得られないというものではありませんが、信仰が本当に神への信仰になるためには、み言葉を聞き学んでいく、という基本的な姿勢が必要なのだと思います。けれども、人間の教師たちには欠けがあり、罪もあり、間違いもあるでしょう。ですから、主イエスは後に、このエルサレムの律法学者たちと対立するようになるのです。しかしそこに至る前に、先ず彼らからしっかり聞き、学ばれたのです。これによって主イエスは、神様のみ言葉を学ぶことに対する模範を私たちに示して下さっているのです。

さて、主イエスを見つけた両親は驚き、母が言いました。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」。すると主イエスはこ

うお答えになりました。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。この会話には、一見すると食い違いがあります。母は「お父さんもわたしも」といっています。しかし、少年イエスが「自分の父」と呼んでいるのは、この神殿の主である神なのです。ルカによる福音書は、母マリアが聖霊によって主イエスを身ごもったことを1章で語っています。しかし、ここで語られているのは、血がつながっているかどうかという問題ではないのです。少年イエスが「自分の父の家にいるのは当たり前だということを」と言っておられることに注目したいと思います。この箇所の原文には「家」という言葉はありません。「私が私の父のものである事柄の中にいるのは当たり前だということを」と記されています。「私の父のものである事柄」を場所として理解すれば、父なる神のものであるこの神殿にいる、ということになり、「私の父の家にいる」と訳すことができるのです。両親が少年イエスを捜し回ってようやく神殿で見つけた、というのがここでの話の流れですから、そのように訳されているのでしょう。両親は、主イエスが子供から大人になる境目であるこの時に、もはや少年イエスを自分たちの子供として自分たちの下に置いておくことはできない、本当の父である神から与えられた使命を果たすために、少年イエスはこれから自分たちのもとを離れていくのだということを予め体験させられた、ということも考えられます。50節には、「両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった」とあります。両親はまだこの時には、自分たちの子である少年イエスが何のために生まれ、どのような使命を神から与えられているのかを理解できずにいるのです。

51節には、「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」とあります。42節で都に上った彼ら家族が、祭りを終えてナザレへと下って行ったのです。しかし、都に上った時とナザレに下って行った時とでは、主語が変っています。42節で「都に上った」時の主語は両親です。しかし、51節の「下って行き」の主語は少年イエスです。子供から大人になろうとする12歳の時に、主イエスは、父なる神の子として、神に与えられた使命を果していく者としての自覚を明確に持たれたのです。それはある意味で、この世の両親の下を離れて、まことの父である神に従って生きる者となるということでした。51節の後半に「母はこれらのことすべて心に納めていた」とありますが、少し前の19節にも、乳飲み子イエスのもとに羊飼いたちが訪ねてきたことを受けて、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」とあります。「心に納めて、思い巡らしていた」というのは、そのことの意味が分かったという姿ではありません。むしろ、分からぬのです。しかし、それら全てを心に納め思い巡らしていくことの中で、やがて、主イエスの十字架の死を深く思い巡らす出来事へと導かれて行ったのではないか、と思います。

52節には「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。」と結ばれています。私は、この箇所を読む以前には、主イエスは真の人間としては、誕生と死の間の少年期や青年期の姿に現実味がない、といつも思っていました。けれども、父の家である神殿で、独り子である自覚に至ったであろう神の愛が注がれた出来事と、母の生涯にわたる「思い巡らす愛」が、私たち一人ひとりに現実に臨んでおられる主イエスを指し示していることに気づかされました。主イエスが高みで私たちの生き様をご覧になっている、あるいは、神がはるか高みにおいて、私たちが苦しみ悲しむ様子をご覧になっている、そういうことであつたら、私たちは本当に救われていくでしょうか。しかし、福音書には記されていない一人の真の人間としての、誕生から公生涯と呼ばれる30歳までの間、真の人間として現実の中でお過ごしになった時がある、ということを思う時に、私たち自身の歩みも、その主イエスの歩みにならっていけばよいというふうに思われます。私たちは、背丈こそこれから伸びるとは思えませんが、主イエスが示してくださいさっているように、「知恵が増し、神と人とに愛された」と語り伝えることのできる信仰を与えられたいと思います。

お祈りをします。

主なる神様、2026年の最初の主の日を迎えることができ、感謝をいたします。今年新しい一年、この世の時の流れの中で、私どもはあなたによって豊かに愛を注がれ、また周囲の人たちからの愛のまなざしに支えられて歩んでいくことができるよう導いてください。今朝は、アメリカがベネズエラに攻撃を加えたという大きな新聞記事の見出しを見ました。詳しいことはまだわかりませんが、2026年の初めに、また新しい戦いが引き起こされたということを思う時に、人間の深い闇、罪の姿を思います。そのような中にあって、この世界とこの歴史を導いておられる方が確かにおられる、という信仰を私たちに豊かにお与えください。この祈りを主イエス・キリストの御名によっておささげいたします。